

吟遊・夏石番矢賞二〇二二

Ginyu Ban'ya Natsushi Prize 2023

福岡日向子 Hinako FUKUOKA



略歴

一九九六年、愛媛県岩城島生まれ。愛媛県立伯方高等学校入学後、俳句部入部をきっかけに俳句を始める。二〇一四年、全国高等学校総合文化祭俳句部門に県代表として出場。二〇一二年～二〇一四年俳句甲子園出場。高校卒業後、愛媛大学入学と同時に「吟遊」入会。二〇一七年「吟遊」第七三号より同人参加。大学卒業後、大阪で銀行員として働きながら、句作を続けている。

授賞理由

若い女性的感性が、単純かつ清新な日本語によって、骨太に表出されている。

授賞作

●「吟遊」第九五号（二〇二二年七月）
癒えるまで蛭袋の中に居て
薔薇という薔薇台無しにして死ぬほどでは
取り乱すことなき不幸額の花
手を繋ぎたいという稀有な感情水芭蕉

●「吟遊」第九六号（二〇二二年十月）
思うところありて黙す草の花
花火の裏でどんな意味にも耐えている
立秋の誰も好きではない一日
ありがともごめんもいらぬ良夜かな
感情論冴えるシャインマスカット
秋の雲どちらともなく嫌い合う
五年後の想像秋の虹が出来る

●「吟遊」第九七号（二〇二三年一月）
オリオンを結べるわたし一人が好き
短日の長堀鶴見緑地線
君への後悔が銀杏並木の奥まで
あの人三人変わる暖炉かな
十二月は嘘泣きのからくりの中で
笑ってないと海豚の海になってしまう

●「吟遊」第九八号（二〇二三年四月）
生と死を思い出させる雪崩かな
仮説のない大地に春の雪が降る
流水動く私が私を解らぬうちに
必然の桜は今日まで未現像
嘘つけばみな同じ罪サイネリア
三月は石の話をして終わる